

平成 22 年 度

人権啓発シリーズ集

財団法人 高知県人権啓発センター

はじめに

この冊子は、平成二十二年六月から平成二十三年一月まで高知新聞に掲載しました人権啓発シリーズ七回分を編集したものです。

さまざまな人権問題の解決を図るための啓発資料として、ぜひ、多くのみなさまに活用していただきたいと願っております。

平成二十三年三月

財団法人 高知県人権啓発センター

理事長 中 澤 彰 穂

目次

一、ケガレと差別	作家 大正大学客員教授	井沢元彦	1
二、「不機嫌な職場」なくそう	朝ジェイファイル代表 経営コンサルタント	高橋克徳	5
三、夢見る力を信じて	朝グレイスノート代表取締役 演奏家	前川裕美	10
四、自閉症者は法則がお好き	翻訳家	ニキリンコ	14
五、小さな弱い人を守る	たんぼば教育研究所主宰	大崎博澄	19
六、等身大の自分のままで	シンガー・ソングライター	堀内佳	24
七、子どもたちの未来を救え	高知県立精神保健福祉センター所長	山崎正雄	29

同和問題

ケガレと差別

(平成22年6月27日掲載)

井沢元彦

いざわ・もとひこ氏

1954年名古屋生まれ。早稲田大学法学部卒業。TBS入社後、報道局放送記者時代「猿丸幻視行(さるまるけんしこう)」で第26回江戸川乱歩賞受賞(26歳)、31歳で退社、執筆活動に専念。以後、歴史推理、ノンフィクションに独自の世界を開拓、最近の主な著書に「言霊(ことだま)」「逆説の日本史1」「16」「恨(ハン)の法廷」「ユダヤ、キリスト、イスラム集中講義」「中国 地球人類の難題」などがある。現在、週刊ポストに連載中の「逆説の日本史」は800回を突破。テレビ、ラジオにも出演中。大正大学客員教授、日本ペンクラブ会員。

同和問題すなわち部落差別解消に向けての取り組みは、日本という国家が抱えている最優先課題だと私は認識している。ところが、そうした危機意識を持っている人は、日本人全体の中から見れば極めて少ないようだ。

「もう過去の問題」と脳天気語る人もいる。だが、そうならば就職や結婚等における差別が完全に無くなっているはずだが、現状は決してそうとは言えない。

私個人は行政サイドにも教育サイドにも属さない人間だが、歴史を研究する者の立場からこの問題を見ると、このことは日本人の歴史と宗教に深くかかわっているのだから、まず本質を知ることが急務だと考える。それが「遠回り」だと思ふ人は、実は差別の本質というものがよくわかっていない。どんな「病

気」でもそうだが、まず原因をつきとめない
と治療のしようがない。やみくもに薬を飲ませても、かえって症状が悪化することすらある。

外国の例を見るとわかりやすいかもしれない。欧米を中心としたキリスト教社会では、未だにユダヤ人（ユダヤ教徒）に対する根強い差別がある。ところが、われわれ一般の日本人から見ると、ユダヤ人と一般の白人の見分けはつかない。にもかかわらず差別はある。これはキリスト教という宗教に由来するものだからだ。イエスの言行を記した「新約聖書」には、イエスを神と認めず、あまつさえその処刑を声高に主張したユダヤの民衆の姿が描かれている。そして彼等は「その血の責任（イエスを死に追いやることの責任）はわれ

われとわれわれの子孫にかかってよい」と主張したと明記されてある。この一文が「ユダヤ人はイエス殺し」という偏見を生み、あらゆる差別を助長した。そこで、近年公開された、キリストの生涯を描いた大ヒット映画「パッション」（原題「キリストの受難」）では、このユダヤ人差別の原因となった台詞が完全にカットされている。しかし、原典の「新約聖書」から削除されたわけではないから、火種は残ったままだ。

これを「対岸の火事」と笑うことはできない。なぜなら、欧米から見て日本の部落差別ほど理解できないものはないからだ。彼等は言う「あなたたちは、民族も肌の色も言語も習慣も同じ人間をどうして差別するのか？」多くの日本人はこの問いに答えることができ

ない。どんな差別も許すべきではなく、欧米のユダヤ人差別もそうだが、少なくとも彼等は「なぜ差別するのか」については説明できる。自己把握しているといってもいい。

ところが日本人は差別をしているくせに、その理由も認識していない。念のために言うが、理由があれば差別していい、ということには絶対にならない。だが、その理由を把握していないということは、病気でいえば原因がわかっていないということと同じで、治療など不可能な最悪の状態だ。だからこそ、その解決は最優先課題なのである。

では、その原因とは何か？ もうお気付きだろうが、宗教に基づくものである。日本人は無宗教だという人は、実は日本人というのがまったくわかっていない。ちなみに、歴

史学者の大半もそうだから、そういう学者の

監修の下に書かれた歴史教科書をいくら読んでも、このことはわからない。西洋史の教科書を読めばなぜユダヤ人差別が始まったか一応はわかる。だが日本史の教科書はそうではないことは、中学・高校で日本史を学んだ人には経験としてわかりだろう。もちろん、江戸幕府の政策などが原因ではない。もしそうなら、江戸幕府が滅び四民平等の世の中になった途端に、そういう差別は影も形もなくなくなったはずではないか。

日本人は広い意味での神道の信者である。

神道という言葉がどうしても受け入れられないなら、「日本教」と言い換えてもいいが、日本人は「ケガレ」というものを信じている。その「ケガレ」を諸悪の根源として排除しよ

うという意志が心の底で働いている。

「ケガレ」とは「ヨゴレ」と違って、実体としては無いものだ。だからこれは宗教なのだが、部落差別とは一言で言えば「ケガレを持つ人々」に対する差別であった。このあたり、来る講演（今夏7月15日、高知市の高新RKCホールで開催される「第37回・部落差別をなくする運動・強調旬間啓発事業」の講演）の場で、その発生から展開に至るまで詳しく分析・解説したいと思っている。

組織の人間関係

(平成22年7月22日掲載)

「不機嫌な職場」なくそう

高橋 克徳

たかはし・かつのり氏

㈱ジェイフィール代表、経営コンサルタント。慶応義塾大学大学院政策・メディア研究科博士課程単位取得。「組織感情」という概念を提唱。人と人とのつながりを再生し、良い感情の連鎖を起こすことで、組織を変革する方法を提案している。著書は「不機嫌な職場」なぜ社員同士で協力できないのか」「職場は感情で変わる」「潰れない生き方」「あたたかい組織感情」ミドルと職場を元気にする方法」などがある。早稲田大学大学院講師。

お互いにかかり合えない、協力し合うことができない「不機嫌な職場」が増えています。

こうした職場で働いている人たちの中には、自分で仕事を抱え込み、気づくと誰にも相談できず、追い込まれてしまう人もいます。こういった職場やつぶれる人をなくしたい。

この思いで「不機嫌な職場」という本を書きました。多くの事例は企業の職場をイメージして書いたものです。

ところが、講演の問い合わせやブログでの書き込みを見ると、企業だけでなく、実にさまざまな組織で同じような状態になっているという事に気づかされました。

行政機関、地方自治体、介護施設、病院、各種団体、組合、学校、地域のつながり…。

社会全体に人と人とのかわりが薄れ、気

づくと自分が人を追い込んだり、自分が追い込まれていたり、いつの間にこんなに息苦しい社会になってしまったのかと嘆いている人も数多くいるでしょう。そうならないために、自分からできることをぜひ考えてください。

ギスギスより冷え冷え

「不機嫌な職場」と聞くと、イライラとした感情がぶつかり合い、お互いが不信感を抱いているような、そんなギスギスした職場をイメージしがちです。

確かに、特定の上司が負の感情をばらまき、「パワハラ」が横行し、職場全体に攻撃的な感情が蔓延（まんえん）している職場もあります。「お前は給与泥棒か。お前なんか早く辞めちまえ！」とひどい罵声（ばせい）を浴びせる上司の話も聞きます。

しかし、実際に調査していくと、お互いがかかり合えない、協力し合えない、冷え冷えとした職場の方が多くあることがわかります。

日本人の特性なのでしょうか。追い込まれると闘うのではなく、閉じこもります。その感情が連鎖するので、みんなが閉じこもってしまいます。

表面的には業務上のやりとりを適切に行っている、自分を守る意識が強いため、余計なかかわりは持たないようにしています。

人とかかわらないことは一見、楽なことです。余計なことに触れないようにすれば、一時的には自分の生産性も維持できます。

しかし、実際には誰も自分の忙しさに関心を持ってくれなくなります。残業が続く人が

いても、「大丈夫か？」の一言をかけようとしません。気づくと自分で抱え込み、自力でどうにかしなければならぬ。こんな状態に陥ってしまいます。

放置すれば危険

問題は、こうした「不機嫌な職場」を放置しておくことが、さまざまなリスクを生んでしまうことです。

まずは、お互いに協力し合えないことによる業務への影響です。ちよつと聞けば解決することにまで自力でどうにかしようとします。生産性の低下、知恵の不足、品質管理の不徹底、調整ミスの発生など、業務上のリスクが高まります。

こうした状況の中で、本当に誰も助けてくれない状況が続けば、自分の中で抱えきれな

くなる人が出てきてしまいます。自力でどうにかせねばと抱えるうちに心や体を壊す人です。あるとき突然、急に体が拒否反応を示します。朝起きられない、身体がしびれる、頭痛や吐き氣がします。職場の中でうつになる人の良くあるパターンです。

「うつになったのは本人の心が弱いからだ」と平気で語る人がいます。でも、それは違います。多くの場合、責任感が強く、仕事ができる人ほどなりやすい。普通の人ならとつくと投げ出しているのに、どうにかしなければと頑張ってしまうからです。うつになったのは、そうなるまで放置した周囲の責任だと考えてください。

さらに、そうした状況が改善されないと、組織や仕事から心が離れ、不正や違反を平気

で行う人が出てきてしまいます。こうなると経営を揺るがすリスクになってしまいます。

お互いを守ろう

多くの人たちが、今、不安の中で生きています。職場の中には、いろいろな事情を抱えて働いている人たちもいます。

障がいを抱えながらも社会で働く喜びを得たい人たち、高齢者になっても生活のために働くがざるを得ない人たち……。一見、不自由なく働いている人たちも、何かを抱えて働いています。自分の中に閉じこもっているのです。これでは、状況は悪化するばかりです。

いろいろな人たちが共に働く喜びを感じ、助け合い、支え合い、学び合うことができる、それが本来の職場です。

ぜひ、お互いを守るという気持ち伝え合

える、そんな職場づくりを目指してください。
来る講座（8月4日、高知市の高知会館で開
催される「人権啓発ヒューマンパワー育成講
座」）の場で、詳しくお話します。

障害者と人権

夢見る力を信じて

(平成22年8月22日掲載)

前川 裕美

まえかわ・ゆみ氏

(株)グレイスノート代表取締役。3歳で音楽と出会う。小学校5年生のときに網膜色素変性症と診断され、徐々に視力・視野を失うが音楽を学び続ける。高校の音楽科(作曲専攻)を卒業後単身アメリカに渡り、語学、音楽を学び、6年間の留学生生活を終える。その間に現地の盲導犬訓練施設で盲導犬グレイスと出会い、日本へ一緒に帰国する。2004年より全国各地でトーク&コンサート活動を続け、人々に夢と希望を届けたいと奮闘中。09年盲導犬の務めを終えたグレイスは天国へ。

いつも「障害がある人もない人も」というフレーズを聞いたたびに、なにかしつくりこないうとか、心にストンと落ちてこないような気がするのとはなぜだろうか。きっとそれは今も昔もこの国にいますと「障害者の人権が確立されていないのではないか」と感じる事があるからかもしれない。

私の人生を振り返ってみても、特に「教育を受ける権利」は簡単に損なわれてしまう傾向があったと思う。私は小学校・中学校・高等学校といわゆる「普通校」に通った。視覚特別支援学校に行かなかったのは、単にそういう選択肢が親にも私にもなかっただけである。

今よりも子どもの数が多かった時代、先生方も私にどう対応すればいいのかわからない

状況で、次から次へと目の前には大きな「壁」が立ちはだかった。そして自分の努力ではどうにもならない部分で、まわりの誤解や勝手な思い込みに阻まれ、何年が経っても乗り越えられない壁もあり、とても悔しい思いをした。

あれから10年以上がたち、「教科書バリアフリー関連三法」なども成立し、社会全体が障害のある子どもたちの「教育を受ける権利」を守ろうという動きになってきていることは本当にうれしいことだ。

ただ、最近知り合った弱視の子どもたちの話によれば、せっかく拡大教科書・拡大読書機・ループ・単眼鏡などの学習をスムーズにするツールはそろっているのに、指導する側の教師にそれらの知識が不足していたり、ま

わりの子どもたちからのひやかしによって、だんだん使わなくなっていくケースも少ない。

もっとひどい話になると、担任の先生から数カ月間ほったらかしにされた子もいて、それでは私の学生時代とほとんど変わっていないじゃないかと悲しくなった。

どうしていまだにこんなことが起きてしまうのか。私は自分自身が6年のアメリカ留学で経験したことで、そこで出会った障害のある人々とその家族・友人・同僚の方々との交流の中でひとつ気づいたことがある。

日本でもアメリカでも「障害のある子どもたちをまわりの子どもたちと同じように生活させる」というのが基本的な考え方なのだが、その意味がそれぞれの国ではまったく違うの

である。

日本では「障害のある子だけを特別扱いせず、みんなに対して平等に接する」というふうに理解している人が多い。最近はどうでもないかもしれないが少なくとも私はそう育てられてきたし、この考え方は正しいと思う。いる人はまだまだいると思う。

一方、アメリカでは「障害があつてできないところは適切なサポートをして、まわりの子どもたちと同じだけの学ぶ機会と遊ぶ機会を与える」というふうに理解されている。これにADA法（障害者差別禁止法）の効力もあつて、障害のある子どもたちにも個々の可能性を伸ばすチャンスが広がるのだらう。

実際にそういう場面を目の当たりにしたこともあるし、何かができることを認められた

とき、その子は笑顔と自信に満ちていた。もしも、日本の障害のある子どもたちも、まわりの健常者にアメリカのような考え方をしてほしい、と望んでいたとしたら、その望みをかなえてあげたいと思いませんか？

日本では、これから「デジタル教科書」の導入に向けて準備を進めているようだが、これはとてもいい機会だと思う。ここで障害のある子どもたちが置いていかれることなく「教育を受ける権利」がしっかり保障されることを心から願っている。

さて、9月15日（水）午後2時から3時、須崎市立市民文化会館で開催される「人権啓発研修ハートフルセミナー」でトーク＆コンサートを行います。私たち障害者が日々どんなことを感じ、どんな社会を作っていきたい

のかを、私のお話と音楽で伝えたいと思っています。ぜひお誘い合わせのうえ、会場に越しください。

みなさまにお会いできる日を心から楽しみにしています。

障害者と人権

（平成22年9月22日掲載）

自閉症者は法則がお好き

ニキ リンコ

にき・りんこ氏

1965年生まれ。翻訳家。訳書にソ
ルデン「片づけられない女たち」、スワン
ソン「目印はフオーク！ カーラの脳損
傷リハビリ日記」など。著書は「俺ルー
ル！ 自閉は急に止まらない」「スルーで
きない脳 自閉は情報の便秘です」など
がある。

子どものころの記憶といえは、フシギオモシロキモチワルイことでいいです。不思議なことはおもしろくもあり、気持ち悪くもあるからです。『神秘』という便利なことをまだ知らなかったので、しかたなく『フシギオモシロキモチワルイ』ということばを自分で作ったのです。

子どもは知らないことがたくさんありますから、フシギオモシロキモチワルイの種には不自由しませんでした。

特に気になったのは、体重計の針が見える小さな窓。この窓の両側はどうなっているのか知りたくて、脱衣場の床にはいつくばり、体重計に目をくつつけてのぞきこんだものです。

砂時計の中、電球の中、体温計の筒の中に

も小さな国があるような気がして、行ってみたいと思っていました。

字を覚えはじめると、町の看板で見かける、行書・草書や変体仮名が気になりました。

ところが、字を習うようになると、楷書かいしよをきちんと覚えるため、続け字を書くことは許されなくなりました。本や新聞の「き」や

「さ」は最後が画はつながっているのに、子どもは離して書かないと叱しかられます。続け字は大人の特権だと思うと、うらやましくて、

20歳の誕生日が待ち遠しかったこと！

ほかにも「大人のもの」と思ってたこがれていたのは油彩。幼稚園ではクレヨンだけです、小学校では水彩絵の具も使うようになります。そして、漫画に出てくる絵描きさんはベレー帽をかぶって油絵を描いています。

それが決まりだと思っていました。

ですから、大人なのにパステルで描くドガや、水彩で描くセザンヌは悪い人に見えました。正義の味方としては、ここはひとつ、フランスへ行つて指導してこなくては。けど、もう亡くなっている人にどうやって会う気だったんですかねえ？

このように、私は「大人」と「子ども」をきっちり分けて考えていました。

そして、母が私を心配させまいと「大人だから痛くないの」「大人は泣かないの」と言うのを真に受けて、大人には気持ちがないのかと思っていました。

また、「大きいのに好き嫌い言っておかしいね」なんて言いますから、大きいお兄ちゃんやお姉ちゃんには、ましてもっと大きい大

人にはなおさら、「好き」や「嫌い」はないのかと思っていました。

だから、大人を困らせること、いやがられることもずいぶんしていたと思います。私はおかげでだれに気を遣うこともなく、のびのび暮らすことはできましたが、やさしくない子だったでしょうね。

大人の顔色を見ることができませんでした。人にはきげんが悪いときときげんがいいときがあるなんて知らなかったからです。

同じ失敗をしても、相手のきげん次第で、ひどく叱られたり、それほどでもなかったりの差がつくのがどうしてもわからなかったものです。

同じように帰りが遅くなっても、冬の方が外が暗いのでよけいに心配されて、よけいに

叱られるのが不満でした。同じ5時15分、同じ15分遅れなのに、前回よりきつく叱られるなんて！

そう、私は、何ごとも数字どおり、ことばどおり、法則どおりに運ぶものかと思っていたのです。

だから、暦に大の月と小の月があることは不気味でした。「ある」は動詞なのに反対語は「ない」で形容詞なのも怖かったし、「たちつてと」が「たていとうてと」じゃないことも悲しかったし、3月1日から5月31日まで春のはずだから、3月にコートを着なさいと言われると反発していました。まわりには法則どおりではないことがたくさんあり、その最たるものが「ほかの人たち」でした。

母は雪遊びから帰った私の手を触って「こ

んなに冷たくなつて」とわかるのに、私のおなかを触っても痛いかどうかわからないなんて。「買わないわよ」と言われたおもちゃは「きつと悪いおもちゃだったんだ」と納得していたのに、誕生日には急にもらえるなんて。こういう不思議はフシギオモシロキモチワルイではなく、土足で畳に上がっている人を見たらうな、人名の誤植を見たような、不吉で、失礼で、落ちつかない感じがしたものです。

人はだれでも、まわりのできごとに何らかの法則を見いだそうとします。ただ、自閉症児・者の場合、いろいろと基本的な情報を見落としているせいで、通らないところにまで法則を当てはめすぎてしまうんでしょうね。

私たちはとかく、自分だけの法則（俺^{おれ}ルール）を信じて変わった行動をしがちですが、

原因は「心の闇」なんておどろおどろしいものじゃなく、あっけないほど「浅いワケ」から発していることが多いのです。

子どもの人権

(平成22年10月23日掲載)

小さな弱い人を守る

大崎博澄

おおさき・ひろすみ氏

1945年仁淀川町(旧池川町)生まれ。定時制・通信制・夜間高校・夜間・通信制大学で学ぶ。67年から県職員(行政職)。70年ごろから、幡多作文の会の教師達と子どもの詩誌「めだま」を編集発行。80年ごろから、精神障害者の皆さんと詩を書く集いを継続。2000年4月から08年3月まで県教育長。同年4月から、たんぼぼ教育研究所を主宰。著書「野の思想史」(猿書房)、「詩集・語らずに終わっただろう多くのこと」(私家版)、「山畑の四季」(高知新聞社)、「子どもという希望」(キリン館)。

“たんぽぽ” 咲いた

明るい窓。人生を支えてくれた本。やさしい植物達^{たち}。静かな音楽。訪ねてくださる方々とお茶を飲んで語らう、どっしりしたテーブル。ぼくが長年描いていたささやかな夢は、こんな研究室を持つこと。そこで、心に哀しみを抱えた人のお話をお聴きし、遠慮がちに励ますこと。

晩年に、家族全体が運命の嵐に翻弄^{ほんろう}されることになり、夢の実現はとても無理だと思っていた。四国管財様の社をあげてのご支援で、南はりまや町2丁目、緑濃い公園の隣に、恥ずかしいほど立派な看板を出していただいた。たんぽぽ教育研究所。

心に期するもの

県庁生活の最後に、ぼくは幸運にも教育という一番やりたかった仕事を任された。

劣等感にまみれて育った自分の幼少年期、深い心の傷に悩む我が子の姿、心に期するものを持つてぼくはこの仕事に飛び込んだ。たとえ孤立しても、自分の哲学を貫く。自分が最前線に立つて、小さな弱い人を守る。でなければ、ぼくがこの仕事をする意味は無い。

教育問題の背景には、経済成長一辺倒の過酷な競争社会、経済的格差の拡大、その結果としての、地域社会の心のつながりの崩壊がある。8年間、悪戦苦闘した。手を尽くしても、教育の枠組みの中で解決できる問題はわずか。しかし、教育に展望を開くのは、小さな弱い人を守る、この教育哲学のほかに無い

ことも確信した。

たんばは教育研究所では、不登校などの教育相談、ひきこもりや障がいのある方々の居場所づくり、教育のあり方や教育政策の共同研究などに取り組んでいる。

この歳になってこんな忙しい目に遭うとは思わなかったが、嬉しいことは、新たな問題に遭遇して新たなものの見方や考え方を学ぶこと。自分にまだ、自己変革を遂げよう、人間として成長しようという強い意思があることを実感すること。

障がい児の学ぶ権利

今年の春は、障がい児の学ぶ権利について、目を覚まされる出来事があった。

ダウン症の中学生が、小中学校を通じて親友だった級友の進学する地元の公立高校に入

りたい、という切実な希望を持って相談に來られた。誠にまっとうな希望。

憲法はすべての子ども達に学ぶ権利を保障している。なんとかこの夢を叶えられないか。自分なりの手は尽くした。しかし、少年の希望は、空き定員のある定時制も含め、現行の高校教育制度という厚い壁に阻まれた。

高校進学率が90%を超える現在、公立高校は実質的に義務教育に等しい。障がい児の学ぶ権利を、時代遅れの制度を理由に排除することが許されるだろうか。現職の時、この事態を予測して備え得なかった自分の不明を心から恥じる。

このケースは、障がい児の学ぶ権利の問題にとどまらない。

学習意欲の乏しさ、学業不振や不登校、暴

力行為や非行など、現在の高等学校教育が共通して抱える問題を解決する道は、学力対策や生徒指導の強化といった対症療法の彼方には無い。

障がい児の学ぶ権利をどうやって保障するか、こうした教育の本質に根ざす問題に、高校教育が正面から向き合うことこそが、全ての教育課題の根本的解決に通ずる道なのだ。

人権感覚というもの

多くの高校現場を歩いた私の仮説だが、問題解決の一つのカギは、高校における学級経営の意識の弱さにある。人権感覚というものが、もつともつと認識されなければならない。

生活環境の厳しいAくん、学習が遅れがちなBくん、体や心にハンディキャップのあるCくんを教職員がいつも心に懸けている。こ

ういう人権感覚を持って日常の教育活動が行われていれば、学級全体に必ずそれは伝わる。生徒の誰もが、Aくん、Bくん、Cくんを心に懸けるようになる。温かい仲間がいる学級ができる時初めて、様々な教育課題が自然に、しかも根本的に解決する。

人権感覚は、どうしたら磨かれるだろうか。問題解決の道を、法律や制度、管理や規制の視点からでなく、いつも、一人一人の子どもの幸せという、教育の本質から考えることに尽きる。

老兵は死なず

余命いくばくも無い老兵に貴重な自己反省の機会を与えてくれた少年は、ある私立高校に進学した。熱心な先生方の支援で元気に通学している。しかし、問題は終わっていない。

彼の提起した問いに、私達が誠実に向き合わなければ、この国の教育に未来は無い。

ぼくはこれからも、たんぼ教育研究所を拠り所に、小さな弱い人を守る活動が続ける。その活動を通じて、子ども達を支える市民のネットワークを広げる。温かい心のつながりのある地域社会の再構築、それが少年に託された、ぼくの最終テーマである。

障害者の人権

(平成22年11月24日掲載)

等身大の自分のままで

堀内 佳

ほりうち・けい氏

シンガー・ソングライター。1961年四万十市中村に生まれる。1歳の時、先天性網膜膠腫により両眼摘出、全盲となる。中学生のころより独学でギターを弾き始めオリジナル曲を作り始める。楽曲「やしろべえ」は「全国わたぼうし音楽祭」において文部大臣奨励賞を受賞。現在、愛や夢にあれたオリジナル曲を中心に、全国でコンサート活動を行っている。「命の大切さ」「前向きに生きることの素晴らしさ」などのテーマは、大きな評価を受け、オリジナルアルバムは「そのまま」と「この指とまれ」の2作で好評発売中。

私がコンサート活動を始めて約30年。この間、全国でおよそ1500回のステージを務めてきた。コンサートは学校関係や行政などからの依頼の他、地域の祭りやイベントなど様々で、タイトルの頭に「親子ふれあい」「命を考える」「しあわせに生きるために」そして「人権」等々、色々な冠が付くことも多い。

しかし、冠の如何・有無に関わらず、コンサートの内容はほとんど変えない。特に「人権コンサート」と銘打たれたステージだからといって、部落差別や障害者差別など個々の問題を取り立てて語ることはあえてせず、ただ自身の生い立ちをそのまま語り、そこから生まれた歌を歌うようにしてきた。

私は、先天性網膜膠腫により、1歳の頃から

眼球を摘出し全盲となった。そんな息子に少しでも多くの人や物に触れさせようと、母は積極的に幼い私を外に連れ出してくれた。

障害者の存在すら隠す家も多かった当時のこと、町を歩くとすれ違い様に「まあ、この子目が見えんがやね、大変やねえ辛いねえ」などと、時には涙を流しながら哀れみの言葉をかけられることも少なくなかった。そんなときも母は全く臆することなく「まあこの子の笑うた顔を見ちゃってや」などと、屈託の無い声で明るく笑いながら応じていたことを、今でもはつきりと覚えている。

また同世代の子ども達から好奇の眼差しを向けられることも多く、時にそれは「いじめ」と表現せざるを得ないような、言葉や肉体的暴力にエスカレートすることもあった。

ある日のこと、眼球の無い私の眼窩^{がんか}に地面の砂を掴み入れた子に対し、痛みと口惜しさに任せて飛びかろうとした私の肩を背後からつかまえた母は、「本当にかわいそうなのは、他人をいじめたり、さげすんだりする人なんだよ」というようなことを、何度も繰り返して優しく説いて聴かせた。

目の痛みなどつくに忘れ去った今でも、その時の母の言葉は強烈な印象として心に深く焼き付けられており、私の人生観形成に大きな影響を与えた。

一方父は、幼い私を海や川に放り込んだり、山を一人で歩かせたりと、大自然の中で容赦無く鍛えた。それは時に、居合わせた人が見かねて思わず水に飛び込み助けてくれたことがあったほど厳しく、私にとって父はただだ

だ怖い存在だった。

ずいぶん後になって母から聞いたところによると、父は「そもそも障害者という特別な人種など存在しない。決して障害に甘えず、自分で自分の限界を決めることなく前向きに生きる強靱^{きやうじん}な心身を持つてほしい」という強い思いを持っていたとのこと。お陰^{かげ}で小学低学年くらいまでの私は、同年代の全盲児の中では飛び抜けて社交的で、運動神経も発達していたために多少は目立つ存在でいられた。

ところが、元来怠け者でさしたる努力もしなかった結果、学年が進むにつれ次第に周囲の友達にあらゆる面で先を越されるようになった。そうになると、他人の中に自分よりも弱い部分・劣る部分を探し、それをからかったり馬鹿にしたりすることで自分の位置を確認し

ようとするようになっていた。

愚かな差別意識の芽生えである。一般的には差別を受ける側だと思われがちで、実際に理不尽ないじめやさげすみを受けた経験を持つ私の心にも、差別意識は歴然と存在したのだ。

そんな情動こそ、他人は元より自身をも傷つけ呪縛する厄介で恐ろしいものである。その呪縛から解放され楽になるための最も早道は、等身大の自分をそのまま受け入れ認めて生きることなのだ。と学ばせてくれたのは、その後の多くの出会いと、その方々を通して得た経験だった。そのことを、コンサートを通じて少しでも多くの人に伝えていければという思いから、次第に今のライブステージのスタイルを確立していった。

戦争や差別など個々の人権問題の解決には、それらの背景や現状を深く学習し、広く啓発することは必要だろう。しかし、それは賢者達に任せるとして、時には私のような人間でもその生い立ちを語り、歌うことで、多くの人が根源的に持つているであろう弱さやコンプレックス、それから来る深い差別意識に直接働きかけることができるのだと、コンサート後に沢山寄せられる感想文等を読ませてもらって確信する。

今から3年前と2年前、両親が相次いで永眠した。その直後、私が悪性リンパ腫にかかり、つらい闘病を経験した。これら貴重な経験も私の生い立ちに加え、人権問題の根本でもある命の尊さをこれからもずっと語り、歌っていこうと改めて思う。肩の力を抜いて、あ

くまでも、等身大の自分のままで。

心の叫びを聴く

(平成23年1月22日掲載)

子どもたちの未来を救え

山崎 正雄

やまさき・まさお氏

1985年高知医科大学卒業。高知医科大学付属病院等勤務ののち、97年より県立精神保健福祉センターに勤務。現在、県立精神保健福祉センター所長。医学博士、精神科専門医、精神保健指定医、全国精神保健福祉センター長会副会長。

日本で初めて自殺者が3万人を超えた1998年以来、自殺者数は3万人超を維持し続けたままである。高知県では97年以降毎年200人を超える人たちが自殺で命を落としている。

自殺者が1人いれば、その数倍の自殺未遂者が存在する。自殺未遂に至らない人を含めれば、「死」を考えたことのある人は膨大な数になるだろう。多くの人々が生きづらさを抱えながら生活していることがわかれる。自殺は「孤立の病」とも呼ばれている。生きるための「つながり」のある社会を取り戻さなければならぬ。これからの社会を担う子どもたちのためにも。

警察庁発表の2009年の年齢別自殺者数では、20歳未満の自殺者が565人、20代の自殺者が3470人存在する。これからの人生を

生きる若者たちが自ら命を絶たなければならなかったことを考えるとき、私たち大人がすべきことは何なのだろうか？ 命の尊さを説くことだろうか？ 生きることの大切さを教えることだろうか？

自殺だけではない。昨年のNHKの調査による、引き取り手のない「無縁死」が年間3万人にもものぼるというリポートは大きな反響を呼んだ。その後も、「消えた高齢者」の問題が明るみに出るなど、いわゆる無縁社会の現代日本の姿が浮き彫りになった。

世界有数の経済大国、長寿国であるわが国は、本当に幸せな国なのだろうか？ そして、この国でこれからの未来を生きる子どもたちは生まれてきて幸せだと感じてくれているのだろうか？

昨年、他県での小学生の自殺がはじめにやるものかどうかということが話題となった。

いじめと自殺の問題は時々ニュースとして浮かび上がっては消えていく。「いじめたのは誰か？」と追及するだけでは、当然解決にはならないだろう。いじめられている子どもだけでなく、いじめている子どももまた、本当は苦しい思いを心に秘めているかもしれないからだ。

子どもたち以上に、他人を押しつけ、人が人を食って生きるような競争社会を演じているのは私たち大人なのかもしれない。そんな弱肉強食の社会の中で、子どもたちに堂々と「社会へ出ておいで」と言えるだろうか？

週刊誌などでは、人生の「勝者」「敗者」と安易に人を評価し、華やかな生活を送る成

功者がもてはやされる。一方で「貧困」にあえぐ人々もいる。テレビや新聞では戦争や紛争、政治問題、虐待などのニュースが毎日のように流れている。何が真実で、何を信じればいいのか？ 大人ですらわからない社会の中に、子どもたちは足を踏み入れていく。

子どもたちは、成長発達の中で迷い悩みながら大人になっていく。「生きる」とは何なのか？ 「社会」とは何なのか？ 自分が生まれてきた意味は何なのか？

ある調査で、中・高生の3割が「死にたい」と思ったことがある」という結果が出ている。「死」の裏側には「生」がある。「死にたい」くらいに苦しんでいる子どもたちの真実の声に、もっと大人たちは耳を傾けてほしい。それも、声なき声に…。

子どもたちは、言葉にして話すことが上手にできないことも多い。ときには、カッターナイフで手首を傷つけたり、ときには食べては吐きを繰り返したりする子どもたちもいる。

なんてひどいことをするのかと責めたてないでほしい。心の中のどうしようもない揺れる気持ちを上手に吐き出すことができず、身体で訴えているのかもしれないからだ。不登校やひきこもりにしてもそうだ。

無理やり、登校させたり、社会に引っ張り出したりするだけでは解決しないことも多い。社会に参加できないのは子どもたちの責任ではない。無論、親の責任でもない。

たとえば、他人とコミュニケーションをとるのが苦手な広汎性発達障害の子どもたちであるとしても、胸に抱えた苦しさを受けとめら

れることがなければ、専門家でも治すことなどできないだろう。

声にならない心の叫びを聴くことができるかどうか？ それは、決して専門家ではなく、子どもたちの周りのふつうのおじさん、おばさんたちができることではないかと思う。

昨年高知でも、子どもたちの声を聴く電話、チャイルドラインこうちが設立された。子どもたちのホンを聴くことのできる取り組みは少しずつ増えてきている。

しかし、もっと多くの大人たちが子どもたちの「生きる」苦しみに耳を傾けてほしい。子どもたちがありのままの自分を受けとめられ、ありのままに生きられる社会をつくっていくことが、大人になってしまった私たちの使命ではないかと思う。

魯迅は小説「狂人日記」(光文社古典新訳文庫、藤井省三訳)の最後に、こう記している。「人食いをしたことのない子供は、まだいるだろうか? 子供を救って……」と。

※チャイルドラインこうち

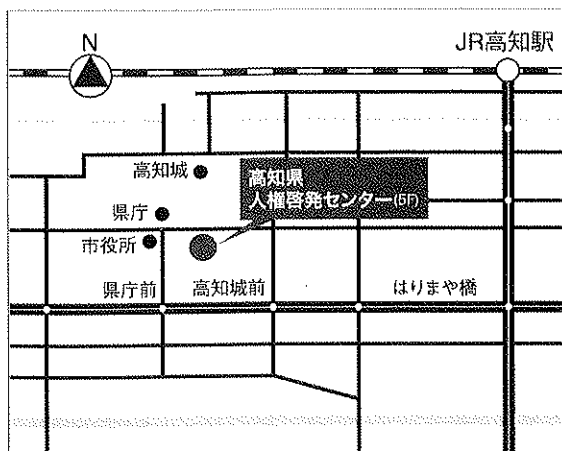
(18歳未満の子ども対象)

月曜～土曜午後4時～9時

電話番号 0120・99・7777

問い合わせ先 090・2788・9977

高知県人権啓発センター 案内図



交通機関

- ・JR高知駅からバス又は土電電車で15分。
- ・バスは公園通り、電車は高知城前下車。徒歩3分。
- ・JR高知駅から、よさこいぐるりんバス、勤労センター下車。

財団法人 高知県人権啓発センター

〒780-0870高知市本町4-1-37 TEL.088-821-4681 FAX.088-821-4440

E-mail center@kochi-jinken.or.jp <http://www.kochi-jinken.or.jp>

じんけんライブラリー (当センター5階)

人権に関する図書・視聴覚教材・パネルの貸出しをしていますので、ご利用ください。

平日 9:00～17:00

図書 1人5冊以内

ビデオ・DVD 1回2本以内 貸出期間は2週間以内

平成22年度

人権啓発シリーズ集

平成23年3月

発行 財)高知県人権啓発センター
〒780-0870
高知県高知市本町4丁目1-37
TEL 088 (821) 4681
FAX 088 (821) 4440

印刷 西 富 騰 写 堂